

巻頭言

なぜ、ロボットは日本人の仲間なのか

竹村 公太郎



水掛けロボット

日本の産業用工作機械の開発と設置数は、欧米諸国と比較して桁違いに多い。特に、外国の人々が奇異に思うのが、日本人はそれらを「太郎」や「花子」と家族のように呼んでいることだ。欧米人は機械に名前を付けたりはしない。本当に日本人は機械、いやロボットが大好きなのだ。

記録に残されている世界最古のロボットも日本であった。

高梨生馬著「からくり人形文化誌」によると、平安京へ遷都した桓武天皇の皇子が、日照り続きで人々が苦しんでいるのを見て、ある水掛け人形を考案した。

その人形は胸の前に洗面器のような器を持っている。人々が川から水を汲んで、その器に水を入れると、人形はその器の水をバシャと自分の顔に掛ける。人形の顔にかかった水は、足もとの田んぼに流れる仕掛けになっていた。その人形の仕草が面白いので、人々は川から水を汲んで、その人形の器に入れ、人形の水をかぶる様子を笑って楽しんだ。そのため、田んぼに水がいっぱいになったという。

共同体の喜び

21世紀の日本でも、苛酷な労働現場でロボットが次々誕生している。

一千年前、水掛け人形は農民たちの労働を助けた。21世紀のロボットたちも、苛酷な現場で人々を救っている。

その集団が同じ共同体かどうかを見分けるのは簡単だ。集団の皆が喜びを共有しているかどうかである。

一千年前の農民を助けた水掛け人形は、農民たちの喜びであった。21世紀の過酷な建設現場の建設機械は、作業員たちの喜びである。日本人はロボットを喜び、人間の名前で呼び、自分たちの仲間になっている。

一方、欧米の人々とロボットの関係は様相が異なる。欧米人とロボットは共同体を形成していない。

侵略と奴隷

世界史はユーラシア大陸を舞台に動いた。その歴史は暴力による侵略の繰り返しであった。暴力は大陸を疾走し、侵略するとその土地の言語を圧殺し、女性たちを犯し、男性たちの目を潰し、過酷な労働現場に追いやった。絶対的な奴隷制度を固めたのだ。

なぜ、支配した者たちは、それほど激しい圧政を敷いたのか。それは奴隷たちの反逆を恐れたからだ。

事実、支配層は豊かになり、教養の衣をまとい、肉体は軟弱になり、いつしか強靱な肉体の奴隷たちの反逆を受けていった。

支配者層にとって、奴隷の苦しみは自分たちの安全を意味した。逆に、奴隷の喜びは、自分たちの不安の種となった。そのため、奴隷はいつも支配層から過酷な労働を強いられた。

侵略を繰り返す社会では、支配層と奴隷が喜びを共有することはなかった。

ところが、この世界史の中で侵略されなかった文明があった。

それが日本文明であった。

侵略されなかった文明

ユーラシア大陸の極東に浮かぶ日本は、一度も異民族の侵略を受けなかった。侵略されなかった日本人は、奴隷になった経験がなく、奴隷制度を作ることもなかった。

奴隷がいない日本社会では、苛酷な労働は仲間が担っていた。仲間が労働を担っているのなら、仲間を助けるのは当然であった。労働を助ける機械やロボットの登場は、みんなの喜びであった。

それに対して、欧米人はロボットに対して、根強い不信感を抱いている。

彼らにとって、ロボットは奴隷だ。奴隷はいつか自分たちに歯向かう。だから、ロボットもいつかは反逆する、という恐怖心を抱いている。

欧米のロボット映画では、ロボットの反逆のストーリーが圧倒的に多い。ハリウッド映画の「ターミネーター」も、人間が造ったロボットが反逆し、人間と激しい戦いを繰り広げていく。

日本の総人口は、一億二千万人をピークにして、減少に向かった。

人口が減りこの社会を支える人がいなくなる、との声があるがそのような心配は不要である。

日本社会では、私たちの労働を引き受けるロボットたちが次々誕生していく。日本人と限りなく良い関係を築いてきたこのロボットたちが、未来の日本人を支えてくれる。

ユーラシア大陸の極東に浮かび、侵略されなかった日本はなんと幸運だったことか。

—たけむら こうたろう

公益財団法人 リバーフロント研究所 代表理事